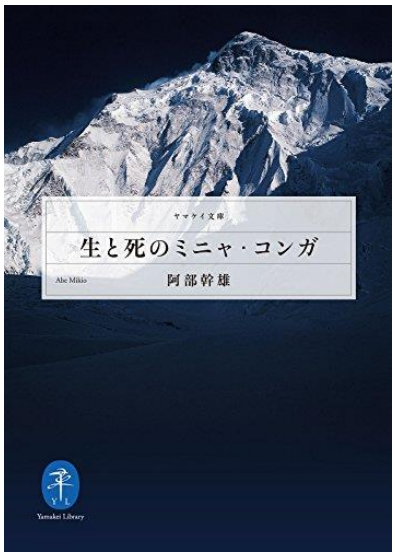
阿部幹雄著 『生と死のミニャ・コンガ』



シリウス・ジャーナル第 61 号（2019 年 12 月発行）で赤澤会員が『那須雪崩事故の真相―銀嶺の破断』を紹介されていたので、今回はそれに釣られて少し古いが同じ著者による本書を紹介したい。

ミニャ・コンガという山は、中国四川省チベット高原の東端にある通称「横断山脈」の中の大雪山脈の主峰（7556m）で、世界のクライマーから“魔性の棲む山”と怖れられていて、40 年近く前に悪天候の中を下山中の市川山岳会の 2 人パーティーが遭難、その内の一人が 19 日間満身創痍で彷徨した末に地元住民に偶々発見されて奇跡の生還を果たした遭難事故で有名になったので、ご存じの方も多いと思う。両手指全部、両足の膝下から下全部を凍傷で失いながらも、リハビリの苦労の末に登山に復帰して、両足義足でヒマラヤのシシャパンマ遠征を果たしたことで知られる松田宏也氏である（同氏著『ミニャコンカ奇跡の生還』ヤマケイ文庫）。また、25 年前には、雪崩の研究と啓蒙に尽力中の北海道雪崩事故防止研究会の若き研究者（当時、北大低温科学研究所助手）を含む日本ヒマラヤ協会隊の若手 4 名が氷河上で行方不明となり死亡している“魔の山”でもある。

さて、このミニャ・コンガでは登頂隊 12 名の内 8 名が悪天の頂上を目前にしてザイルに繋がったまま滑落死するという悲惨で稀有な大惨事となった北海道山岳連盟ミニャ・コンガ遠征隊の遭難があった。40 年程前のことである。遭難の原因は隊自体の脆弱性であったらしい。

本書はこの時に偶々ザイルに繋がる前だったために難を免れたが、独りクレバスに墜ち込んで死地を彷徨った末にかろうじて生還を果たした著者が、この遠征隊の結成から現地での登攀や遭難の模様、遺体捜索・収容、ご遺族への対応などを紡ぎながら、ミニャ・コンガに逝った仲間達への鎮魂を綴ったものであり、同時に、遭難とはどういうものなのか、遭難救助はどこまでどのように行うべきなのか、遭難遺体にどのように向き合えばよいのか、或いはご遺族の気持ちにどう対応すべきなのか等々をミニャ・コンガの遭難事例から考証したものである。独りだけ生き残ったことへの世間からの批判と痛恨、逝った仲間への思いなど、遭難から何十年も経った後までの鬱屈した心の動きなども綴られている。

この本に描かれている遭難の瞬間は、録音されていた交信記録と併せて生々しく再現されているが、一本のザイルに繋がって落下していくその壮絶な状況は言語に絶する。少し長くなるがそのまま本書から引用する。『・・・視界に動くものを感じ、顔を上げた。数人が雪壁を滑落していく。「あっー」、一瞬のうちに下降を待っていた隊員達の足元のザイルが落ちていく隊員達の重量でピンと引きつり、立っていた者たちを次々になぎ倒した。恐怖に驚愕した彼らの顔。恐怖の眼。見たことも無い形相だった。（中略）七人が墜ちて行く。誰も声を出さない。誰も絶叫しない。誰も救いを求めない。無言のまま滑落していく。（中略）一本のザイルに繋がったまま滑落して行く。七人はどんどんスピードを速めて視界から遠ざかる。標高差二千数百メートルのミニャ・コンガ北壁が、その先にあった。北壁の彼方に、七人が消えた。1981 年 5 月 10 日午後 5 時 20 分・・・』。

何年か前に著者の講演を聴く機会があった。非常に精緻で理論的な方とお見受けしたが、その一方で冷徹な印象もあった。瀕死の遭難事故から生還し、後々まで諸々の困難な終戦処理も引き受けられた方に自ずと備わった風貌でもあろうか。人のいのちとは何かを深く考えさせられる本でもあった。

山と渓谷社 2000 年刊、2017 年ヤマケイ文庫収録（950 円）　　（酎、2020 年 7 月　記）